

安政見聞録

上

服保德編輯

安政見聞録

武江　服部氏藏版

叙

和漢古今の傳記に称せらるゝもの牛に汗し棟に充しぬれば。去てのまども世界の廣き事実の多端なすまじきに及び。繁きは一厭ひて簡易にせむ漢文の書よりおける文字を減してその通ぜざるを我とも日本のよし。律書但徠先生が蘐園叢書の傳を門人等に纉がして文字少し記を甲もよしなよし。或人の記にもい入るを讒ばいかゞ何

まゝ穎(えい)敏ならざるを。書作(てつく)る者(もの)の妙(めう)しいならん。趣(おもむき)りと
いへども俗輩(ぞくはい)にハいへば情(?)通(つう)じがたきなり。因(よつ)て
今(いま)この見聞録(けんもんろく)ハ。文章(ぶんしやう)の體裁(ていさい)をいとはず。悉(ことごと)く
俗談(ぞくだん)平語(へいご)を雜(まじ)へ。善惡(ぜんあく)邪正(じやせい)の差別(けぢめ)をさとしめて。
見聞(みきゝ)のまゝに揭(かゝ)げ出(いだ)し。人每(ひとごと)心(こゝろ)に掛(かく)べきことゞもを。
專(もつぱ)らに誌(しる)すになん。抑(そも)人(ひと)に五氣(ごき)七情(しちじやう)あり。
喜怒(きど)哀樂(あいらく)の間(あひだ)に發(おこ)て。動(やゝ)もすれバ人の心を亂し。其(その)
常(つね)を失(うし)なはしむる。平生(へいぜい)思(おも)ひを深(ふか)くして。心中(しんちう)

所圓悟を捨ば。凶変危急の時に臨み。恩を忘れず義を顕さるゝの。物語をも具に挙て。童蒙稚女を励まんの。一端ともなれかしと云爾

于時安政丙辰季夏

晁義隠文題



安政見聞録巻中總目標

巻之上

巻之中

通計十七條總目的畢

東都おゐ橋に万治年
本姓にて禁らるよし物ふ
人名生より業然れども毎
年ゟ年にて妻拂ありし言人
揮び酒を初まり世を得
あ身分ますます進仰安政二
乙卯年十月廿二日察ぬ人ふ
國を渡りて初まりて八酒樽ふ
て家内に手拂ありしを
父存命八十五 妻まき八十 子息
喜兵衛四十 妻お浜四十 孫喜兵衛廿六
妻いと二十三 同孫亀十五 同おか十三
辰吉七 同長吉四 同はる猫
其中ゆゑしこの事をきそ
各寿並祝酒と浴ぐ図を
あ所へ掲げ出せり

一寿斎芳晴画

安政丙辰四月朔より深川富ケ岡の境内にて下総の国成田山不動明王の開帳ありその賑ひ古今に稀なり

護摩講中

成田山 奉納 講中

芳晴画

凡例

○此書ハ元来我子孫をして忠孝義を励まさんが為に。近曽見聞せる所を挙て敢て信偽を問ふにあらず。只定かなる條にあらずして。住所姓名の明かなるも。是を著さば其人ハ遺憾あれバ。後の子ども當時現存せし人の上なれバ憚りてあらはにしるさず。只其の所の町の某と某とのミ記しぬ。是ハその人に用ありその行状と志とを述て少年を諭さんまでなれバ。又まゝ画を多く加へしハ幼童の常に愛て閲せざらん為のミ。諸君の賢覧に備ふるにあらず

○巻中に去ぬる文政天保度の凶災を出せるハ。安政見聞の意に差ふといへども因ミあるを録出し。近世のことを知らしめんとて也。その餘いとも古き世のことを載るもことあるを同意なり

作者再識

安政見聞録巻之上

○地震の辨

夫地ハ四圍に竅ありて相通ず。譬ば蜂の巣の如く。また菌の鱗の如しといへり。故て陰火の氣其中に伏し。火氣伸んとするに。水氣に推れて伸ることを能ざるぞ。人の轉筋のごとし。この時に當て火氣ハ陽にして剛き故。陰氣の陰を突破りて發し。因て大地震動するに至るとぞ。この理天に有る時ハ雷霆と爲し。人にをゐて北極の地の如きハ大に寒じて熱を生ざることを能ざるぞ。また赤道の下ハ太陽の爲に勝れて熱し易くあれども息ふ。因て多く震ふこと少なり。温暖石多き地ハ下に空穴ありて熱氣吹入て冷氣の爲に抑斂極まるときハ大に震ふ。その甚しきに至りてハ。地裂け山崩て。江河逆に流るゝの類

災害極りなきに及ぶ。凡そ天地間災変の尤もの。地震に勝る
ものなし。和漢古昔より此の患へ史に見えたる所挙て数へがたし。然
れども史にハ只大地震人民牛馬多く死せるとのミ載て其精
きをいへざれバ今其事を察するによしなし。近来越後三條の地震
及び文政の度京師の地震天保の度信濃の地震等ハ年を去
ること甚遠からずといへども。その傳聞する処区々にして。その精しきを
知がたし。茲に此の度東海道の地震ハ至て近きことなれバ。[illegible]
語る人によりて大に差ることあまれバ。傳聞極めて宜からず。依て人
馬の壓死或ひハ焚焼の本説を記て。その変異の廣大なるを察する
のミ。然るに大江都ハ地震甚稀にして。折節小動ありといへども。屋
宅を崩せしことなく。俗にいふ江都ハ掘抜の井と称せる多し。故に地

氣常に散ぜざれバをもて大震あるとぞ。と人大に安堵せり。然るに去年安政二乙卯十月二日の夜亥の刻過る比暴に大地震動して殿舎を破り民屋壊れ倒るゝのみにあらず。八方より火燃出て暗夜も宛然白晝の如く。三十余箇所の失火烟天を焦し。民家の男女梁に打れ或ひハ棟垂木に壓れ。あるひハ土庫の壊るゝに當りて死するもの数をしらず。適命全きも。物に挟まれて出るを得ず。親族その傍にありて扶んとすれども力及バず火燗須臾に近づくに及びて是を救ふに遑なく。看為く活ながら猛火に燃れ忽に灰燼となる。是憐むべきの甚しきなり。又ハ不図凶変に遭て或ひハ壓れ死し或ひハ焼れ死し。或ハ手足を折りて廃人となるもの挙て算へがたし。是も各悪人にあらざれども時の難に罹りて非命に終る。敢て善悪の差別を問ざるこの時に

貴くて善者といへども免かれ至て難し。時の幸不幸のことはいふも
なけざる変災に遭ひ蒼惶恐懼の時におゐて常々至孝あるひハ忠節。
その心がけよき人の自から功を顕しゝるあり。今傳ふる処の二三を
挙て後生を励ます。然れども其住所姓名の詳なるも憚なきに
あらねば記さん

○孝婦非命に死せし條

于茲武州千住宿と云ハ日光道中の出口にて。大小の旅店軒をならべ。
邊鄙と云へども繁華なり。爰に何某と云る商賈の嫁。その年二十
二三なりしが。常に姑によく仕へて孝行をつくしける。然るにその夜の
変災にあひ家内の男女十五六人被驚慌震よといひも果ず。其とも対面を
捨て逃出る。かの嫁ハ部屋に在て針線をなしけるが大に驚きて汁擂

奥庭に戸を蹴ひらきて。庭の方へ立出るに。瓦の落るも風に木の葉の
散に異ならん。蔀格子もみるがうちに忽地推倒け倒れてあり。天井
落りかゝる様来ぞと眼を瞑ぎ胸を轟き。渾身戦慄と震ひつゝ。知
れ倒れて在けるが。稍と心づきて四辺を見まはし。姑の見えざるは。老
人の足弱くて出かねしものならんと。姑を懐ふにと足を呼ば。案の
ごとく姑は擁きて逃出んと身は翫せしかど歩行がたく。燈火は顛
に消え心周章て途方にくれ。呻吟うちに震顚く障子外を鳴居
ぬけて行先に様くなり。進退の度を失ひて更に生る心地もなし。
嫁の姿しても母を救はん何方に在れしと数回。呼ぶ姿の吟るに姑は力を泻
て。聴此知ぞと回答あがら。そも是を郷導に出んとすれども嫁は姑の姿を吟
ほぐ家の内に在せしが積く此方へ出のえと叫びあがら班入って夫


孝婦姑を救んとして還て非命に終ぬ


壽扇

を背に負ひ。出んとしけるを。憐むべし。その侍の柱摧けて二階の
梁その上へ落かゝりて。二人諸共に打倒され。起あがらんとするも甲斐なく。
壓にうたれて即時に死せり。妻下婢は用の事あり。他所へゆきて在り
けるが地震に驚き止むを俟て。急ぎ立帰りて家内の老の心許
なく。その侍を索むるに。召仕ひの男女等は大かた外面にありぬれど母と
妻のあらざるに驚き。うろたへまどへバその家居は崩れ傾き家根落て内へ入るべ
き道もなし。然るに二人はこの裡に呻吟あるものならめと声をあげて
名を喚べど更に對へもあらざりければ。心も心ならず逃出る下奴を呼び
よせ力を竭して覆ひたる家根を穿ち倒れたる柱棟を漸々に取除て
さまをみるに。妻の背に母を負ひ。そのまゝ外に俯して。二人ともうち
遍めかれて七竅より血滴りて。目もあてられぬ景状にて。悲歎にくれけるが。

躯てあるべきにあらざれバ頓て棺を整へ香華院へ送りしとなん
婦ありてハかく婦人の志丈夫にも勝り始め驚きて前後を顧
ミず身を以て逃れ去る常人の情といふべし然るに姑の力及ざる
幼き震動を懼れ破壊しける家に立入てしうとを負ひなが
災害を遁んとせしが不幸にして非命に死し後にしうとを拝まらく
姑め逃るゝとき諸共に伴ひしならバこの難ハあらざるべきにその時
しうとを忘れざるハ至孝といふべし是その理ハ然るをなづる変に
臨て動かざるハ賢人君子の上にもあるぞ男子といへども常人
のうへ一心不動なるべく況や女子に於て哀この婦のごとき至孝と
称すとも過当ならじ怪しむ躯のごとき志ハありながら僅二三
歩の間にて死を免るゝを能えざるハ実に天命といふものなるらん

○孝女死期に紀念を託す條

志に哀れをとゞめしハ深川富川町の裏とかや。柏屋の何某なる者ハ以前ハ有徳に蓄へしが薄命のうち續き。今ハ次才に困窮して日仕にも雇をして世。ミで夫婦さし對ひ老ぞ。いと淋しく送りけるが十月首ハ過ぎりし。母の年忌にあたるによりて心ばかりの佛事をいとなまん親き人にも供養せんと同二日ハ逮夜とて朝まだきより野菜を調へ求めんと焚くありかゝる僅一二町を隔てし所に大工何某なるもの、娘二十ばかりになりけるが。日来親しく往かよひより。今日の佛事の手傳ひせんとてとの家に来りて。いと甲斐しく働きて。夫婦が手をぞ助けゝる。かくて其夜戌時ころ。夫婦の者も大かた果て。娘ハ帰らんといひけるを。柏屋夫婦ハ是を止め。もはや更刻にも程近からんに。今宵ハ泊りて

聟の親もしく帰らせよといへども。その意に任して遁りつ。程ありちう
せし調度など推かへしつけて売却もうちぬ。あるや憩んと床なせど。数ん
としけるその折から。暴に虚空動揺なし。その家ねに覆らんとす。三
人は大に驚きまて妻の手を引開て。天庭に走り出けるが。梢屋の檐倒
れて大道へ横ふる。今すこし遅かりせばこの檐に打れて。身を傷んを
危なかりしと吐息吻て跪き居る。かの嫗はあまをみて。父母の身の
うへ心許なし。暇まうしにといひも敢ず一散に逃出ぬ。夫婦は呼び止め
むかり。今諸共に行て訪ん。霎時待ねといひけれど。聞えしやまさ
聞えずや。回答もせずして走り出けば。梢屋は妻に向ひ。日来より
て孝心の世に勝れたるものなれば。心裡然もあるべし。程遁けれど
夜更たり一人やは帰されど。我は跡より追着て彼家へ送り遣ん

に。おん身ハ志て不在ゆゑ家を護りしを捨て逃出しが。此処ハ殊更地震烈しく。且家作さへ舊ければ。大かた倒れざる家もあらざれバ。然るに家並五六軒。遙けき所に女の声して嗟苦し助てよと呼る声をほのきけば。かの娘によく似たり。稲屋ハいぶかりて。彼処か此処と尋ぬるに。傍の檐の崩れ下に。身を挾まれて起もあらず。頻に叫ぶハ其の娘なり。稲屋ハ見るより大に驚き。汝しがこそ我と倶に逃うべかる道あらじ。下を怪うたねとしてげり。とのひあがら檐口の倒れし桁ハ手をかけて引起さんとなしけれど。生憎に桁大きくして一人の力に動きもやらず。其の辺にも老若男女。右往左往に群がれど。親ハ子を見失ひ。妻ハ夫を索ねて。呻吟なしが誰あつて是を扶んとするものあらじ。兎角する間に二三軒あなたより火燃え出て。

忽地猛火熾になり。焔は八方に飛びちるほどに。彼翠る火みよと鳴くに。
崩れ一家を捨除て。資財雑具を出さんとせしこの時歴に赤々となりぬ。
まだ死やらん猛火の為に。燔れんとするの。姿を繞りに泣き叫び。助
けてよと人を呼ぶ実に焦熱の苦しみもおよぶまじと思ふほどに。猫
屋は老翁の姿に貼さへ悍くと鳴き狂ひ心急てかの柳を揚んとすれ
ど力及ばず。其下柏屋の妻は焔に殺き丈を索ねて来まじが。柏屋
ひとりを来ねまし力を副てこの柳で引起せしかど不妻も心の利ける者
あて。彼方へ廻り緒手をうけ力を竟めて引けれど。垂木欝土屋根瓦。
ひしがれ重りくれば。あつくに動り給へ。丈挿はあきりに心を焦燥て枝ん
こすれど術計あらず。その間に焼落る火焔は既に近づきぞ。やむ身の上
に及んとせしこの時娘は弱り果るを。遂に出して丈挿を呼び。に志は然るもの




梅堂豊斎画

なから。今ハまた火も逃るゝ事を免れんとするに術なし。愁歎を救んとして。
此身を苦るまで不怪我あるべけれバよしこの身の罪深かり。又捐てきしも
なく火を遁れ思ふ所詮この身ハ罪業深く。かゝる憂目にあふとも。
前の世の宿業にやと思へバ今さら詮方なし。憤ふを出さんまでさる主
此身とても幼ふ時より父母と共に年老て。伽すべき妻をのこし世に
思ふことハなかりし。然るを今に死んあるべし誰を便りて世を渡らん。願くハ
此身ら丈夫妻に代りて父母の行末を頼ミまゐらせ度のこし死期の
願ひなりしこの時に及びても猶父母を慕ふる切なる心に猶や丈夫ハ。
涙をさへ流しつゝその身のことハ心弱りてとぞ。命のあらんかぎりハ貢
ぎてまゐらすべしと回答に娘ハ歓びて頭に挿る蒔絵の櫛と簪とを
手自抜とり。猶屋の妻にあたへて以やう。遠き未来頃に至て大切に持

しものゝ言を母に与へられ。これぞ紀念として父の出る時ぶふあらバ一遍の回
向をしてたまはれと云侍ることいふうちにはや猛火近づきて。渾身も熱
きなどなりしバ。梢屋丈夫ハ不便さに程なるに忍びざるを猶ハ顧て遁れ
し。又甲斐なき身に拘るゝも道あらバ悔とも遁るべし。去来顧てとりよ
ねどに丈夫ハ涙残をしけれども。さて何とも詮方なければ涙ながらに
立退。これが家も火の出ハ近づきぬ。及ばぬまでも若者の家財なくて様ハ
ぬ調度を一ツ二ツとり出さんと。門へ出れども八方へ吹ちる烟に咽せ。
眼くらみて働き得ず。はや西復つゞけ楼に火さへ燃つきけれバ。はや是
までと僅かなりの衣服ことを背負て。その所をのがれ出頭て大工の方に
逃り。かゝるにとてあんこれが方より癖悸きにや逃れおし。姑に恙あらざれバ。
まづ歓びて伴のようを委しく語り櫛笥を出して母に与へれバ母ハ狂

氣のどくなりかの焼址へ馳つきて見るに娘ハ焦げ薫りて在し姿に似もつかで苦しきに面の土に衝入まで有しと見えて咽ハ燔殘て鮮なりしバこれが女児と知りていよ〳〵哀しさの何ふ喩へんやうもなく同じふし悲しとこしを人々に諫められ。死骸を野辺に送りせしところ辞して見るに天道ハ善に福ひし。悪ふ禍ひすぞと然るにこの女子災厄に遭ひて。生ながらその身を燔る。かゝる危急の時節に及び。猶父母のうへを忘れず。親友に託して死を潔くれ。かゝる志操ありといへども。非命に死するを免るまじ。佛家に所謂宿業といふ。あまりのことをいふもおろかなん

○肥前の老夫天変を知るの條

高に二三千石を領する家あり。その門番なる老丈ありて年来老

突に仕へける元来算術ハ勿論文学もありけれバ。尋常の叟ならざりしが。
十月二日の落着に至り。門外へ出て四方を瞻望し。忽ちに内外
その同僚に示して曰く。今宵かならずや地震あるべし。その動揺え
げしかるべし。家に居らバ怪我あるべし。是て用心をなすべしと。若ハ。その用
心ハその他なからん。第一に食物なりとて。暴におほくの米を炊き。勝
手に入てそのまゝを焚く。同僚ハ皆て諸共に。米を炊き焚もあり。
頓て老叟ハ荘内を詮まハりて人々に。そのよしを告けるにぞ。是を信
ずる者もあらざれバ。彼老叟何をか知らん。それ天変地妖のできハ賢人
君子も知る事難し。況やかの老叟をや。必ずや狐狸に変化されて。
かゝる謬語をいふなるらんと。多く嘲りけり。老叟ハ飯を焚終
りしまゝを。おさへて櫃に入れ。味噌香の物など取添へ。裏の方なる馬

場へ持ゆき。莚を敷て戸外に居まり。同僚もまくしきへ来て。居るもの總て三四個さまぐの雜説ふれや戒刻もるぎ実刻も近づく。壱まどもきせるとるし。この夜天色暖かにて。寒冷にあらざれとも。時まさ十月の初めなれば。久しくも外に居るに堪へず。光丈に綿入きせて一心地して。我部屋に帰るもあり。まして大小の書を伝じて。ひまなく夜半に至るよむねを心細く帰るところ。猶あに居るもあり。兎角する間に夜もりの拆木の音や実刻なり。この時天色朦朧として半天に雲霞覆ひ星の光りも近く見え。老丈は猶四方を視やり。物もえいはず独り息つかける折から旋風の暴に落きたるがごとき音して。大地忽地鳴動す。四辺の草木波のごとく。屋舎の崩るる音耳を貫く。老丈は傍をも去らず莚の上に膝を坐して俯き居たり。暫時ありて動揺静まり。老丈を始め四居しものども。

徐々と立出て。荘内を見廻るに。或ハ家の潰れし方あり或ハ形跡
梁をもて。これに壓れ死するもあり。また手足を摧かれて。死もやらず
呻くあり。子ハ親を尋ね親ハ子を慕ひて泣叫ぶ。そのさま更に目も
あてられず。奥へいらんと行て見るに。是また大に崩れ損じて往べき
方へいかえもあらず。火燒場ハおのの寢覆ひかゝりて既に火の燃んとする
あるぞ。老夫ハ周條にかくと告て。水を汲来りこれを消し。まづその急
難を済ひ。かくて漸くこの家の主人。この事を悦て老夫を召し。汝何とて
かゝるを知る。実に汝あらずバ。この家忽地燒土とならんと老夫を稱め
荘内を見廻りしこそ功績なれと。数多の褒美を賜りけれバ老
夫ハこれを謝してひそかに。下僕男係ハ老夫ハ。いかでか天地の變を
知るべき。但しこの身不幸にして若年より今に至り。かゝる地震に二度


一寿斎
芳晴画


質朴の老夫
天変を知て
主家の火
災をすくふ

あゐぬ下僕ハ元越後の国三條の生まれにて去ぬる文政十一年二十たらずの
なりけるが大地震ありて家潰れ死するもの数を知らず下僕僥倖
にその難ハ免れけれど失火に遭て家財農具残りなく焼失ひ途方
なくて迷ひ出隣国なる信濃へ来りここにて月日を送る程に弘化四年二月に到り
まことなる哉大地震あり折しも善光寺如来の開帳にて賑ハしく遠近より
参詣の人夥しく集会するもの殊に即死怪我人多かりしハ人の能知
る所さてその節も僥倖に恙なくてそれより後江戸へ来り年久しく御
恩を蒙りけるなり然るに最初三條にて大震にあひしとき物識る人
のいひしにハ凡大地震のあるときハ天色朦朧として空近く星の光り衰る
に倍まさ温暖なるものなりと聞てゐるを今に忘れず毎夜空をうかゞひ居
常の空にあらずバ心を安んじてねむりしが信州地震ハ二月にて彼国別して寒気

強きに。このころすべて温暖なることハ常に倍せり。又その前夜より星の光を發すること大きくして昴参の中の小星倍に耀星と唱ふるものも鮮明に見ゆるのころ翼舞ひ驚噪ぎ立雉子聲を和することあり。都て是地震の兆と覺しき人にもことを告。竊に準備なりけるが果してその翌晩に大地震のありけれど準備せしまゝ怪我もなさず。されどまた此処にても家財残らず失ひぬれば詮方なくて江都へ出ぬ。その老若數多を失して。死しける中に恙なきハ全くその前兆を知たる故也。是より後ハ星を仰で空を候がハざる夜もなくぞ起るにこの一両日まへ地震の兆ある故其騒動ハ在せざるど人々にも告しが。彼者のいふを侮りなひし人々ハ多く過なひけり。まこと事を候ひし人ハことに恙なく在することぞ下僕が歎びなきとひとしくべきハ主人ハ別して野夫にも功の者ありとハ誰もちよつといふべしと天に歎息せられしとぞ

擬るはこの要ごとゝ。実は後来の心得とすべし。和漢三才図会に地震の條にいはく。地中に竅あつて蜂の巣のごとく。水溜り陽気是に出入は。その陰陽相和して宜きを得る事常なり。陽気滞して出ることを得ず。歳月を積べば地脹もし水溢る。故に井の水涸て時気暖なるは鬱解て発る時大気透とほりてその鬱解脹ることゝその理は通じて震らんとする時は蒼天昇くるりて星の大さ常に倍して見ゆ。地升て天の陰にあらず雨らんとする時に山の気通ぜざるごとく既に伏陽発出するなり。ことごとく為に地震動にて以て始め震ふ時気猛烈なるをもつてこれが為甚。その次は緩柔之。その後微動ありて伏火のいまだ出ざるを以て乃至半年一年也。その余残あるものゝ。但大地震の時海の汀泥沼涌騰て黒き浪山のごとくに流るゝ世にこれを高浪とさしてこれを脹る所の地暴に

え沈むなんどせしを洋中へ波辞にして見ればかぎらん。豆奈美へいで海
岸の事と云ふ云がの哩が星で見て変あらんを察するへ。この説によく合り
猶ていへこの時に。昇機の藕が云で梅里。徹て用心せざる人多く喪亡
しくありといへ一文不知の老叟なりしが考る所ありて。言出せるを經べ
からん。宇治拾遺物語にいはく。唐土に一人の老嫗あり。朝ごとく起て後
ある岳に登りて帰ること。暑寒晴雨に拘らん身の務とす事なりし。
人其の故を知らずして或る時是を疑ひありがて一時弱官等老嫗に此
事を問けるに老嫗答へて此の山上に。年舊る古墳あり。傳へていふ此
古墳に若血の著ことあるならバこの邑忽ち沈溺すると亡父の云しを
云り聞て我の其若き節より。朝頼起てまづ是を見るへ一朝も怠ず
者を告。終るにあらせんと云へと。聴て弱官等へ大ニ笑ひ。りいでざるこの

あるべきぞと嘲りて帰りしが。各密語ひあへるやう。彼古墳に血を塗て老媼を変術魅まゞ。さらば一具ならんとて。人物の死したるを索ね出し。腹を引裂てかの古墳に塗つけおきたり。老媼ハ翌日とも知らずして雲仙の嶽岳に登り。古墳を見るに覚えずらん。殷血の甚てあらんとハ。去不詳て大ふ驚き。山上より鵯ごつかく麓下迄て吐息吻き。今日この邑に大変あり。疾く網父を居付て。一刻も早く山に登ませ。然なくバ命危ふからんと言捨てまた立り己邑の内を逃まわり。この上若かける。この老媼が家まで八老人の何をかいふと疑ひくかるども捨おくべきにあらざれバ。頓に資銭雑具を緘げ。宛然急火の如来しでらく。周章て山二へ逃亡る邑の内ふても心ぞそ。素朴なる老ハ生で吹て日来より律儀なる。老媼が云放ならんと是に随ふ者もあれど。

多くは老耄の繆説と侮りて動かぬあり。殊に彼弱官等は嘲り狂ひ噪ぎせしぞ。徒らに指さし笑ふ。かくてその日未刻過るころ。暴に大地震動して。残りなく海に没し。僅に三の岳を遺せり。ここに於て山上へ逃登りたる者の外は。ことごとく死にけるとぞ。これ彼の古墳へ殷血を著しは弱官の所為なれど。その時にてそのことあるこそ既に天変の兆なりけれ。巫史匹婦の言といへども時として験あり。その兆を見て侮るは道を知らぬ人といふべし

○士人自ら少く飢民を救ふ條

或人の物語に。一人の武士あり。元来薄禄にて貧しといへども。常に慈悲の志あり。然るにある夜大震して。その家半傾きけれど崩れるに至らねば。まづ安堵のおもひをなし。近隣へいでたれば。親しき人の家


丼めし


士人飢民と
憐まえて街
頭に握て飯
を施を

人を伴ひ。己が家へ帰り来りしが。夜も明るに程近し。其時その妻に示
していふやう。今宵所々を馳廻りしに。大かたの家は焼失災に罹りて飢渇
せる者の幾千人といふを知らず。その中にもいと哀に見えし老若あり。
今より飯を焚出して施さんと。米は焚けど釜小さくて。ことに多くの
取らねど是を握り飯となし。いかにして持出んと。家内で見るに器はあら
ず。米を焚く桶こそよけれと。縄をもて縛りその端を肩にかけてその中へ
握り飯を盛て持出し。或ひは道路に転び倒れて。途方に暮れし老
若に。かの飯を与へければ。涙を流し手を合せて歓ぶこと限りなし。かの武
士も諸共に随喜の涙を流しながら。人々に与へるから。僅かの握り飯今
は残りすくなになりたり。猶道路に呻吟の者も幾百といふ限りもあらば。何
とぞ与へんとおもへども物のたらざれば。力足らざるを独り嘆息て立

戻らんとせし所に丼めしの行燈出して飯を商く家のありけるが。直に亭主
ひと立よりて其の飯握り飯にすり。有る限りを売まじとて亭主に覚えき
漢子の言も出ず吾儕活業なれば今日ハ未の證ぎ出て親族の方へ持ら
んと拵たる飯出ては人ハ売る事はなり難し。と断つまり人に武士ハ大ふ怒
りて売らぬものあらんずて行燈を出し。置たる吾を穢士と侮りそ
扣此の人ハ亦や心得がたし一旦武士が賞ふけるを愛でうハあるべきしと白眼
つめていひければ。亭主ハ是に懼ましき。看板を出せしハ家族を忘
得違ひ今日ハ商ひを休らん由て許さんすべしと侘ぬれど武士ハ猶
入まじ。今より後ハ何ふ由せよ。我ハ看板をうえて来りしとりつで壁く
出さるべき故左のままに預て売まじと理をえて切に責らるで。亭主ハ
顔を赤うずらきぐハ売つそ由年らせんかその飯桶に入れおかくし。其の飯を

こゝろ貪人多くてハいとく迷惑なり。米にても許しのことと思へども可成ハこゝろ愛ましと携に腰でうち掛て。動くべき術もあらん。亭主ハ拳げて君が家族幾個在まるか存ぜずとも。この米にて一飯の糧ハ足りぬべきを強て如此如此宣ふて。吾們追つて行燈を出しこの匕を発して責むることハ両刀で。華のよに似合しからん曲ての義ハ許させ給へとのみに武士急ぎて吾家族に合せのあつ愛ドしとのみをなどて貴人我如此くまで極飯を持出られし器小さくいふがまに施しぬれバ。遺憾におもふその折から。すこに行燈のあるをみて泣入まいらす飯あり。今求めて飢人に与へんとおもふむかしえと思ひて亭主いらち笑ひこの飯とても二升餘り限りもあらぬ飢人を十分が一も救ひ難けん。始め施しのみにて出志ハ達しがたしといひ果ぬに武士がいうふも我分際にて。幾個の人をも救はん。汝が言を候バ

して我もよくそこは知りたり。然れども一ツ懐に些ばかりの黄金を持せしが。その限りは救んとて元来つらぬ情欲なり。汝もまげて我に与へさば陰徳の為ともなるらん。去来頼くと首にかけたる旅嚢をさしつくれば亭主へこの兄忽地に形を改めて武士を仰ぎ視て額を著き。さても賢き心ろかな。世に善者のありといへども君が如きは稀なるべし。その志しを承へまれば。何条否むでもあらん。僕を素めざこの飯を君に薦らし奉りまする。却ては君まで背ひのあらじ図て白米の料を受卿なれば薪の代は君に力と食さんのことはとても免し。の丈とりふ。武士咲て大に歓び右件の飯を撮り。持出て其知る人に施して帰りしとぞ

按るにこの武士。かかる凶変の時にあひて。家の破壊を顧みずて元より乏る身にもあらねを。資銭を捐て飢民を救ふ実に善

老といへども可なり。世に金銭を捨るものも。又志ある人稀なり。適些細の金銭を捐て。人を恤むことあれバ。その姓名を彰して。徒を衒ふの心あり。先年米穀飢饉して。饑民街に縦横たるに。或富家夜毎に粥を焚き。擔桶に納て荷ひ来て。或ひハ橋上街頭に在る貧人乞食に与へしかど。敢てその名を顕ハさず。前後五十余日が間一夜もこれを闕ことなしとぞ。これこそ実の陰徳なるべし。五雑俎に見えて云く。貸銭を擲して権貴に媚ことハ肯く些微を捐て貧乏を済ふことハ天下の通惑なりと和漢古今常人の情毫末も差ひなし。是に反して慾寡く。他人の為に計るものハ千に一二のみ。

安政見聞録巻之上終









